

大串弘美作 「ポケベルが鳴った時」

<前編>

- 前田隆 おはよう。
- 佐藤千晴 おはよう。何だ、隆かあ。
- 隆 「何だ」はないだろ。あ、健二だと思ったんだろう？
- 千晴 まあね。
- 隆ナレーション おれは前田隆。青春高校2年生。自分で言うのもなんだが、バスケット部の副部長をしているバリバリのスポーツマン。朝からかったるような声を出しているのは、佐藤千晴。バスケット部のマネージャーをしていて、キャプテンの田中健二と付き合っている。田中は小学生の時から、何度か同じクラスになった古い仲。小学生の時は、結構親友のつもりでいたんだけど、中3で再び顔を合わせたら、まるで人が変わっていた。何にでも格好をつけて目立つ反面、何となく誠実さが感じられなかった。
- 隆 お前、マジに健二と付き合ってるのかよ？
- 千晴 んー、まあね。
- 隆 言っちゃ割るいかな？ でもお前も知ってると思うけど、あいつ、お前以外にも女いるみたいじゃん。
- 千晴 んー、まあね。どうでもいいよ、そんなこと。健二は飾りだもん。一緒にいてサマになるやつも一人ぐらい必要じゃん。
- 田中健二 オース！
- ナレーション 現れたのは、当の田中健二だった。
- 千晴 あ、おはよう、健二。昨日は楽しかったね。今日も鳴らしていい？
- 隆モノローグ 「鳴らす」って… ポケベル？
- 健二 ああ、いいよ。何だよ、隆。意外そうな顔だな。
- 隆 いいや。お前、ポケベルなんて持ってんの？
- 健二 当たり前だよ。ま、今じゃモテる男の必需品ってとこかな。
- 隆 また格好つけやがって。
- 隆モノローグ それにしても、何だよ、この千晴の変わりようは。健二も健二だけど、この女も相当なもんだな。好きなのか遊びなのか、どっちなんだ、一体？
- 千晴 じゃ、放課後、部活でね。
- 隆 おお、じゃあな。
- (効果音) (放課後のチャイム)
- (効果音) (バスケットをする音)
- 女子A ねえ、田中君って、いつ見てもカッコいいよねえ。いいよなあ、千晴は。あんなカ

ツコいい彼氏がいて。

千晴 まあねー。やっぱ男はルックスだよな。

女子 A そうだよな。それに田中君って、スポーツができて、頭もそこそこいいし、言うことないじゃん。

(効果音) (ポケベルの鳴る音)

男子 A 先輩、ポケベル鳴ってますよ。

健二 サンキュー。ちえっ、美穂かよ。

隆 だれだよ、美穂って。

健二 こないだ、あんまりうるさいからデートしてやったんだけどさ、ポケベル持ってるって話になったら、今度は「番号教えてくれ」ってうるさくって、教えちゃったんだよ。したら、何勘違いしたんか、しょっちゅう鳴らしてくんだよ。よかったら、お前にやるよ、あの女。

隆 お前、そんな言い方はないだろ。

健二 冗談だよ、冗談。ムキになんなよ。ジャスト・ジョークさ。(笑う)じゃ、先に行ってるぞ。

男子 A キャプテンって、バスケはできるけど、何か好きになれない人ですね。

隆 うん。でも、あいつも昔はあんなやつじゃなかった。中学時代に何かあったんじゃないのかな。

ナレーション その日の練習が終わって、後片付けの時のことだった。

千晴 健二、一緒に帰ろうよ。

健二 わりー。おれ今日、隆たちと約束あつから。夜にでもベル鳴らすから。

千晴 オーケー。じゃ待ってるからね。

健二 おう。じゃあな。

隆 何だよ。おれ、お前となんか約束した覚えはないぞ。何だ、また別の女か？

健二 お！ ご名答。この間ナンパしたのがいい女でさ。今日も約束入ってんだよ。悪いけど、そういうことだから千晴には口裏合わせてくれよな。その代わりに、まだ時間あつから、今日はおれが片付けといてやるよ。お前、先、上がっていいぞ。

隆 全く、お前にはついていけないよ。じゃあお先に。

隆モノローグ やっぱりあいつはやなやつだ。昔のあいつはあんないい加減じゃなかった。何があつたんだろう。

ナレーション そう思いながら、おれは家に着いた。

隆 ただいま。

母 お帰りなさい。朝言ってた試合用のユニホーム、持って帰った？ 来週も使うんでしょ？ ちゃんと穴空いたところを縫っておかなくちゃね。

隆 あ、忘れた！ 部室に置き忘れてきちゃったよ。ちょっと取りに行ってくるよ。

ナレーション おれは慌てて学校に走った。

(効果音) (バスケットボールがバウンドする音)

隆モノローグ あれ？ まだだれか練習してるのかな？

ナレーション おれはドアの透き間から体育館の中をのぞいて驚いた。何と、そこで練習しているのは健二だった。新しいガールフレンドと遊んでいるはずなのに、やつは一人ハアハアと息を切らせて、苦手なドリブルを一生懸命練習していた。

隆モノローグ あいつ…。いい加減に遊んでいるだけの人間になったのかと思ったら、今でも人一倍努力してんのかあ。一体どっちが本当のあいつなんだろう？

ナレーション おれの頭の中は、健二のことをあれこれと考えて、複雑な気持ちだった。次の日の部活で――。

(効果音) (バスケの練習風景)

コーチ えー、来週の対抗試合のメンバーを発表する。山口、木下、後藤、田中、前田…。

ナレーション 当然のことながら、キャプテンの健二や副部長のおれは今回も無事にメンバー入りしていた。

コーチ …それから、前田、今回はお前が中心になってやってみろ。田中は前田のフォローをしてやれ。以上。練習始め！

(全員) (口々に) えー！ キャプテンがフォローだって？ キャプテンなのに？ それってマジ？

隆モノローグ 信じられない。おれが中心に？ 何でキャプテンの健二じゃないんだろう？ ちよっと悔しいけど、だれが見てもあいつが一番なのに…。

ナレーション 何も言わずに黙ってうつむいている健二を見て、おれは昨日独りで一生懸命練習していたあいつの姿を思い出した。

隆 健二、何か悪いな。おれなんかがいいポジションもらっちゃって。お前、昨日だってあんなに練習してたのに…。

健二 え？ お前、見てたのかよ。へ、どうせ見て笑ってたんだろう。「そこまでしてカッコつけたいか」って。

隆 いや、そんなこと。ねえ…。

健二 (さえぎるように) お前におれの気持ちなんか分からねえよ！

隆 あ、おい、健二！ 待てよ！

隆モノローグ あいつ、一体どうしたんだろう。何をそんなに悩んでいるんだろう。昔はもっと素直なやつだったのに…。どうしたら前のようなあいつに戻してやれるんだろうか。

(効果音) (喫茶店の BGM とガヤ)

ナレーション あとで健二に聞いたのだが、やつはその後、千晴に、「話がある」と喫茶店に呼ばれて、彼女に会っていた。

健二 悪い悪い。待ったか？

千晴 健二、もう別れよう。
健二 そんなこと言うなよ。悪かったよ。遅れたこと怒ってんだろ？ だからこうして謝ってんじゃない。ケーキセットおごるからさ。機嫌直せよ。
千晴 そうじゃないの。あんた、キャプテン下ろされたんでしょ？ そんな男、カッコ悪くて付き合ってるんじゃないわよ。
健二 お前、遊びだったのかよ。
千晴 バカねえ。マジだと思ってたの？ あードンくさい。いい加減にしてよ。とにかく、これでおしまいね。
健二 ま、待てよ。おい、千晴！（店を出る）
（効果音） 「キー！ バン！」（健二が車に跳ねられる音）
千晴 け、健二…。健二、健二ー！

<後編>

ナレーション おれは青春高校2年の前田隆。バスケット部の副部長をしている。キャプテンの田中健二が、ガールフレンドの佐藤千晴を追いかけて道路に飛び出し、車に跳ねられてしまった。幸い命に別状はなかったが、全治1か月の重傷で入院した。おれは3、4日してから見舞いに行った。あいつの自慢の顔も傷つき、頭を打って何針か縫ったために今は坊主だった。

（効果音） （ドアをノックする音）

隆 やあ、健二。具合はどうだ？
健二 隆…。ああ、まあ痛みはだんだん収まってきたけど…。
隆 何だ、元気じゃないのかよ。千晴はどうした？ 来てないのか？
健二 ああ。あいつはおれが救急車で運ばれた時、付き添ってきたきりだ。
隆 そっか。あれほどお前に熱上げてたのに、冷たいやつだな。まあ、気にすんなよ。
健二 気になんかしてねえよ。おれはあいつ以外にだってたくさん女いるんだから。別に千晴程度の女の一人や二人くらい…。
隆 なあ健二。そんなに無理すんなよ。おれの前では本当のこと言えよ。お前は小学校からの付き合いじゃないか。この際だから、はっきり言っていいいか。今のお前は、昔のお前とは違う。なあ、今のお前は本当のお前じゃないんだろう？ 中学時代に何があったんだ？

ナレーション 自分でもビックリするような大きな声に、健二はじっとおれの顔を見た。そして、久しぶりに見せたまじめな顔で、ポツリポツリと話し始めた。

健二 中2の時、すごく好きになった女の子がいた。思い悩んだ挙げ句、思い切ってその子に胸の内を告白したら、一言、「あんたみたいにダサイ人、嫌いよ」と言われたんだ。すげえショックだった。その時、おれは心に決めたんだ。「もうこんな

惨めな思いをするのはイヤだ。だれもがあこがれるような、カッコいい男になってやる！」って。それでバスケット部に入部した。だれにも気づかれぬように、人の何倍も練習した。勉強も頑張った。いろんな雑誌を読んで、カッコいいと思われることは何でもした。ムースやコロムも使ったよ。酒やタバコもやるようになった。別にうまいと思わなかったけど、それもカッコづけさ。それでみんなチャホヤしてくれるようになったし、それまでは高嶺の花だった千晴みたいな女とも付き合えるようになった。でも、こないだ、キャプテンの座をお前に取られた挙げ句、こんな姿になったら、途端にだれも相手にしてくれない。見ろよ、今までくっついてきたやつが、だれ一人として見舞いにも来てくれないんだぜ。ポケベルだって、もう鳴らない。千晴だって…。

隆 健二、お前…。

健二 おれは一体今まで何のために、あんなに努力をしたんだ？ 何であの事故で死にまわなかったんだよ！（泣く）

（効果音） ピピピピ（ポケベルの鳴る音）

隆 ポケベルが鳴ってるぞ。どこだ？

健二 その引き出しの中だ。見てくれないか？

隆 「カミ、ハ、アイ、ナリ」。何だこりゃ？

健二 「神は愛なり」じゃないのか？ さっきもあったんだ、それ。

隆モノローグ 「神は愛なり」って何だろう。キリスト教っぽい言葉だけど、だれがかけたんだ？ 少なくとも千晴じゃない。おれはこいつに何て言って励ましたらいい？

ナレーション 適当な言葉が浮かばないまま、おれは帰りかけた。

隆 じゃあ、おれそろそろ行くよ。また来るけど、何か欲しいものあるか？

健二 いや、別にないよ。…千晴に会ったら、おれを運んでくれた礼を言っといてくれ。じゃな。

隆 じゃ、お大事に。

（効果音） （ドアの閉まる音）

ナレーション 廊下に出て、エレベーターの前に来ると、ちょうど下からエレベーターが上がってきたところだった。

（効果音） （「チン」とエレベーターが階に着く音）

隆 あ、おい、千晴！

ナレーション 降りてきた人の中に千晴がいた。

千晴 隆…。

ナレーション おれの顔を見た彼女は、そのままエレベーターで戻りかけた。

隆 おい、待てよ。何で戻るんだよ。お前、あいつの見舞いに来たんだらう？ ま、そこに掛けろ。

ナレーション おれたちは、待合室のベンチに腰を下ろした。

千晴 だって…。今更行けないよ。わたしのせいで、健二…。

隆 …あいつ、口では言わなかったけど、待ってたぞ、お前のこと。行ってやれよ。だけど、何でお前、今まで見舞いに来なかったんだ？

千晴 あの日、健二の手術が終わったあと、健二の、包帯でグルグル巻きにされた顔を見て、わたしは何てことをしてしまったんだろうって思った。わたしが健二にあんなことを言わなければ…。

ナレーション そう言って、千晴はなぜ健二が道路に飛び出したかを一部始終話してくれた。

千晴 わたし、思ったの。「わたしは健二のために何をしてあげただろう。わたしは健二に何を求めたんだろう」って。健二にカッコよさばかり求めていたけど、でも本当に大切なのは、そんなことじゃなかった。それが分かったの。

隆 それで、ここに来たんだ。

千晴 事故の後、どうしていいか分からなくて、暗くなるまで当てもなくフラフラと歩いてた。自分があんなことさえ言わなければ、健二はあんなことにはならなかったのに。健二はあんなにも真剣にわたしのこと思ってくれたのに。自分は何て人間なんだろう。自分勝手に、人を傷つけて…。なのに、それに対して何もできない。「健二、許して…。神様、許してください！」ってそう叫んで、ふと目を上げたところに「神は愛なり」って書いた看板があったの。それを見たら、なぜか涙がポロポロ出てきて、止まなくなっちゃって。それはキリスト教会の案内だったんだけど、すっごく教会に行きたくなっちゃって、日曜日、行ってきたんだ。その牧師さん、こんなこと言ってた――。

牧師 …そうですか。そんなことがあったのですか。佐藤さんのおっしゃるとおり、人間っていうのは本当に愚かなもので、ついつい人の中身よりも外見を気にしてしまうものです。自分に対しても相手に対してもね。勉強ができたり、スポーツができてたり、カッコよかったり、何か優れたものを相手に求めます。そして、それゆえにその人を愛する。そんな人が多いですね。しかしね、神様の愛はそういうものではないんです。神様にとっては、運動オンチな人も、勉強ができない人も、みんな貴くてかけがえがないのです。聖書でね、「あなたは高価で貴い。わたしはあなたを愛している」と神様はおっしゃってます。今、あなたは、自分自身を軽べつし嫌っているかもしれません。しかし、そんなあなたでも、神様は受け入れ、愛してくださっているのです。神様に向かって「許してください」とさえ言えば、許してくださいます。佐藤さん、神様がわたしたちのありのままを愛してくださるように、彼のことを愛してあげたらいかがですか？ あなたに本当の自分を見せられなくて、あなた以上に苦しんでいたのは、田中さんかもしれませんよ。

隆 じゃ、もしかして、さっきのポケベルのメッセージは…。

千晴 うん。今の素直な気持ちを健二に伝えたいと思って、病院にまでは来れたんだけど、顔を見る勇気がなくて…。それでメッセージを入れたの。

隆 大丈夫だよ、千晴。会いに行けよ。それで今の気持ちを話せ。そうすれば、あいつもきっと許してくれる。おれ、あいつの親友だからさ。分かるんだよ。ほら、何してんだよ。あいつ、待ってるぞ！

ナレーション 千晴を押し出して、下りのエレベーターに乗ったおれは、あれほど嫌なやつだと思っていた健二を、ごく自然に”親友”と呼んだ自分に我ながら驚いていた。おれも、あいつを今、ありのままで受け入れたのだ。

隆モノローグ 「すべてを受け入れる神の愛」か…。

ナレーション おれは、ふとそうつぶやいていた。

<完>